

宝寿の風

第3号

発行者
宝寿院住職
田辺信雄
TEL 62-5739

宝寿院住職 田辺信雄

3月11日、巨大地震と大津波によって、未曾有の大災害をもたらした東日本大震災は、被災地の人たちの多くの尊い人命を奪い、街の全てを破壊・流出させただけでなく、不況と言われつつも経済発展の恩恵にどっぷりつかっていた日本人の心持ちをも、根底から一変させてしまいました。

命からがら高台に逃れ、住み慣れた故郷や我が家、逃げ遅れた人たちが津波に飲み込まれるようすを目の当たりにして、ただただ呆然とする被災地住民の映像は、日頃は当たり前のことのよう
うに思っていたことや日々の何気ない生活が実は大変幸せなことだったことを改めて思い知らせてくれました。
また今回の地震では当院も檀信徒会館の屋根がわら等、建物の一



部が損壊しましたが、幸いなことに本堂および、本尊さまをはじめとする仏像、歴代の位牌、仏具等はみな無事でした。
ただ、墓地においては多くの墓石や灯籠等が倒壊するなど甚大な被害を受けました。
無常とは、仏教の考え方の基本ですが、これは、「この世に永遠なものはなく、形のあるものは必ず壊れる」ということです。だからこそ「今日この一日をどう生きるか」

が大切だということを教えています。
これは、東日本大震災が、私たちに教えてくれた教訓とも重なるものです。
被害に会われた檀家のみな様に対しまして、心よりお見舞い申し上げます。

合掌

被災者救援活動に赴く

この度の東日本大震災の被災者救援のため、住職と檀徒総代坂本新一様ご夫妻他5名、計8人で、車3台に分乗して、4月13日に岩手県陸前高田市の被災者が集まる避難所に赴き、炊き出しの救援活動を行ってまいりました。

用意したのは群馬県の代表的郷土料理「煮ぼうとう」500食、まだまだ充分な

食べ物もなく、心の傷も癒えない被災者の方々に、こんな時こそ自分たちにできることを何かさせて頂きたいという止まれぬ思いからの活動でした。

もともと、ほんの少しだけでも喜んで頂ければという考えでしたが、岩手県には煮ぼうとうはないということもあり、珍しさも手伝ってか、お替わりをしてくれる人もいるほど喜んで頂きました。



平成二十二年 寄進者ご芳名

昨年中に檀信徒の方々より、ありがたいご寄進を頂きましたのでご紹介致します。

- 一、法事用椅子15脚 根岸幹男様
- 一、懐古庵エアコン二基 井桁樟治様
- 一、懐古庵電気工事一式 坂本雅義様
- 一、懐古庵用長机 坂本和芳様
- 一、懐古庵門標 坂本敏明様
- 一、懐古庵看板 小沼唯二様
- 一、庚申堂門標 坂本 陽様

本堂で法事を行う際に、座れない人のために、お詣り椅子を寄進して頂き、ご老人等に大変喜んで頂いています。

また、懐古庵改修に際して、必要な電気配線工事一式を無償で引き受けて頂き、照明器具の配置やコンセントの位置等に細かな配慮をして頂きました。

懐古庵の土間には楠製の一枚板で作った長机を寄進して頂き、来訪者の接客時等に便利に利用させて頂いています。

さらに、懐古庵と庚申堂に御影石製の門標、懐古庵に一枚板製の看板を寄進して頂き、名所の雰囲気とともに来訪者に分かりやすい表示ができました。

ありがとうございました。

温故知新② 寄木戸の地名

寄木戸という地名について、その由来を考察した人が過去に何人かいました。その説はおおよそ次のようなものです。

今から1000年ほど昔の平安時代には、邑楽郡一帯は佐貫荘（さぬきのしょう）と呼ばれていました。寄木戸は佐貫荘の一番西に位置していました。

当時の領地というのは支配者の力関係で

維持されていきましたから、隣接する領地の支配者からの侵略に、絶えず備える必要がありました。

そこで領地を防衛する上で重要な場所には城塞（じょうさい）・砦（とりで）を築き兵を常駐させていました。

この城塞のことを当時は木戸と呼んだということから、佐貫荘の西寄りの木戸のある所という意味で寄木戸と呼ばれるようになったというものです。

それなら、寄木戸ではなく西木戸と呼ぶ方が自然なのではないかという疑問が残ります。

別の考え方は次のようなものです。

平安時代に続く鎌倉時代になると、佐貫荘は、大むかでを退治した伝説で知られる俵藤太（たわらのとうた）こと藤原秀郷の子孫佐貫氏や、その分家の小泉氏、古戸氏、古海氏、赤岩氏などにより分割支配されていました。寄木戸は佐貫一族の寄木氏の領地でした。この寄木氏の寄木というのは、もともとは姓ではなく、小泉氏などの鎌倉幕府御家人が、戦時の「いざ鎌倉」という時に、見方として馳せ参じる援軍という意味の寄騎（よりにき）だと思われます。

寄木戸の「戸」は、「津」と同様に港を

意味します。静岡県の焼津市や滋賀県の大津市、三重県の津市など、津の付く地名は、そのほとんどが港にちなんだものです。

一方、茨城県の水戸市や、青森県の八戸市、兵庫県の神戸市、埼玉県戸田市なども同様に港にちなんだものです。

また、昔は海の港だけでなく、川の船着き場も港だったことは、利根川に限らず、大きな川の岸には「戸」のつく地名が多いことから分かります。

ちなみに、太田市古戸の泉福寺には、古くから水運の神様の金比羅（こんぴら）さまが祀られています。

堤防のなかった昔、寄木戸にも利根川が流れていた時代があったことは、宝寿院の墓地北側や、かつて「どぶ田」と呼ばれていた今の大泉西中の敷地、大泉消防署西側の水田等の地形から容易に推察できます。

埋め立てにより、今では分からなくなりましたが、大泉西中や大泉消防署が建設される前は、三洋電機西側の道路と、その西側に広がる水田との間には、約3m程もの段差がありました。

したがって、寄木戸という地名は、寄騎の住む港Ⅱ戸に由来するというのが私の考えです。